

して外科療法が行なわれたものは15例、放射線療法が行なわれたものは4例であり、予後は現在生存例が9例、死亡例が10例でそのうち2例は遠隔転移によるものであった。Kaplan-Meier法による5年累積生存率は58%であった。今回、上顎癌の頸部リンパ節転移経路および、原発巣再発様式に重点をおいて検討した。

2) 上顎扁平上皮癌一次症例についての臨床的検討

伊藤 英史・石原 修
武田 幸彦・岡野 篤夫 (日本歯科大学新潟
森 和久・土持 眞 (歯学部口腔外科学
又賀 泉 第二講座)

上顎扁平上皮癌一次症例28症例の臨床的検討を行った。原発は上顎洞癌が16例、上顎歯肉癌が12例で、硬口蓋原発はなかった。男女比は上顎洞癌では3.7:1と男性が、また上顎歯肉癌では0.7:1と女性が多かった。初診時年齢は上顎洞癌が32歳から88歳平均61.1歳、上顎歯肉癌が45歳から79歳平均67.1歳と上顎洞癌に比較して年齢が高い傾向にあった。TNM分類では、T1:1例、T2:4例、T3:8例、T4:15例で、N0:21例、N1以上:7例であり、上顎歯肉癌において頸部リンパ節転移例が多かった。Stage分類でStage III、IV以上の進展症例は、上顎洞癌で15/16:93.8%、上顎歯肉癌では9/12:75.0%といずれも大半を占めていた。一次治療は、上顎洞癌でいわゆる三者併用療法が14/16:87.5%に、上顎歯肉癌では、7/12:58.3%に行われていた。5年累積生存率は、上顎洞癌32.1%、上顎歯肉癌35.0%であった。

3) 口腔領域における黒色病変 —悪性黒色腫3例と悪性黒子2例—

野村 裕行・星名 秀行
鍛冶 昌孝・高木 律男 (新潟大学歯学部口
大橋 靖 (腔外科学第二講座)
鈴木 誠 (新潟大学歯学部附
属病院臨床検査室)

悪性黒色腫:症例1;72歳,女性。初診:1980年10月17日。硬口蓋に黒色腫瘤を認め、T4 N0M0, Stage III (UICC, 1987)の診断にて、上顎骨部分切除術を施行し、術前、術後にN-CWS, PSK, DTIC, ACNU, VCRを投与した。術後8年、他病死した。

症例2;67歳,男性。初診:1995年11月2日。上顎歯肉に黒色腫瘤を認め、T4N1M0, Stage IIIの診断にて

て両側頸部郭清、上顎骨部分切除術、レーザー焼灼を施行。術前、術後にDAV, IFN-β療法を計5回行い、1年3カ月再発認めず。

症例3;73歳,男性。初診:1996年10月8日。硬口蓋と頬粘膜に黒色腫瘤を認め、T4N0M0, Stage IIIの診断にて、上顎骨、頬粘膜切除術を行い、術前後に、DAV, IFN-β療法を施行し、経過観察中。

悪性黒子:症例4;64歳,男性。初診:1991年9月6日。硬口蓋に黒色病変を認め、DAV, IFN-β療法後、腫瘍摘出術、レーザー焼灼を行い、5年3カ月経過し、再発認めず。

症例5;68歳女性。初診:1981年8月4日。口角に黒色病変を認め、N-CWSの投与後、腫瘍摘出術を施行した。15年経過し、再発なし。

4) 当院における過去11年間の上咽頭癌の放射線治療成績

笹本 龍太・斎藤 眞理
椎名 真・清水 克英 (県立がんセンター
小林 晋一 (新潟病院放射線科)
長谷川 聡・大倉 隆弘 (同 耳鼻科)

はじめに:当院における過去11年間の上咽頭癌の放射線治療成績を集計したので報告する。

対象:対象は1985年から95年の11年間に当院で初回放射線治療を施行され、最低40Gy以上照射された上咽頭癌27例。Stage別ではIはみられず、IIが2例、IIIが3例、IVが22例。また化学療法併用群は20例、非併用群は7例であった。

結果:全体の5生率はover all survivalで55.5%、Stage IVだけでみるとover allで48.0%であった。Stage別、化学療法の有無等で5生率に差はなかった。再発例は12例で、Stage IIが2例、IIIが2例、IVが8例で、化学療法併用群が10例、非併用群が2例であった。

考察:当院における上咽頭癌の放射線治療成績は全体で5生率55.5%と、他施設の報告に比して同等であった。化学療法の有無で5生率に差はなかった。